

「でんでんむしのかなしみ」

新美南吉

いっぴきのでんでんむしが ありました。

ある ひ その でんでんむしは たいへんな ことに きがつきました。

「わたしは いままで うっかりして いたけれど、わたしの せなかの かのなかには かなしみが いっぱい つまってる ではないか」

この かなしみは どう したら よいでしょう。

でんでんむしは おともだちの でんでんむしの ように やって いきます。

「わたしは もう いきて いられません」

と その でんでんむしは おともだちに いいました。

「なんですか」

とおともだちの でんでんむしは ききました。

「わたしは なんと いう ふしあわせな ものでしょう。わたしの せなかの かのなかには かなしみが いっぱい つまってる のです」

とはじめの でんでんむしが はなしました。

すると おともだちの でんでんむしは いいました。

「あなたばかりでは ありません。わたしの せなかにも かなしみは い

「はいです。」

それじゃしかたないとおもって、はじめのでんでんむしは、つづのおともだちのトリスへいきました。

するとそのおともだちもいきました。

「あなたばかりじゃありません。わたしのせなかにもかなしみはいくらでもあります」

そのつづ、はじめのでんでんむしはまたつづのおともだちのトリスへいきました。

こうしておともだちをじゅんじゅんにたずねていきましたが、どのともだちもおなじことをいっているのでありました。

とうとうはじめのでんでんむしはきがつきました。

「かなしみはだれでももっているのだ。わたしばかりではないのだ。

わたしはわたしのかなしみをこらえていかなきゃならない」

そしてこのでんでんむしはもう、なげくのをやめたのであります。